

高校生における学習を通じた居場所 の成立 ーオールドホール中ホールを事例にー

12210152 松垣日葵里

はじめに

・文部科学省（2024）より、**居場所**はすべての人間にとって欠かせない要素であり、若者や子供にとって、孤独や孤立を未然に防ぐためにも**不可欠な要素**であるとした。

・だが、近年は、社会構造や経済構造の変化によって、子どもや若者が居場所をもつことが困難になっているため、**子どもや若者のための居場所をつくる**ことが重要だとした。

先行研究①

○宮台（1997）

ブルセラを売る少女やチーマー、コギャルといった若者が、家や学校、地域以外の空間である「街」に集まるようになった理由を明らかにした。



「学校化」により、学校の評価基準が家や地域社会にも持ち込まれるようになった。

- ・家や学校・地域に、居心地の良さを感じられない
- ・学校の評価基準から逸脱したい

と感じる若者が公共空間に集まるようになった

先行研究①より

・公共空間は、**家や学校に居心地の良さを感じることのできない・学校の評価基準から逸脱したいと感じる若者の居場所**として機能している。

・実際は、先行研究で対象となるような若者以外にも、公共空間を利用する若者が多く、その中でも「**勉強**」をする若者がみられる。

・若者が公共空間で勉強する理由や、公共空間が若者にとってどのように機能しているのかは、**既存の研究では説明できない。**

先行研究②

<公共空間における若者の学習空間>

○遠藤ほか（2021）

大学生の学習場所としてのサードプレイスを調査

→図書館や公園のベンチ・本屋のベンチ（公共空間）

カフェやファストフード店・ファミレス（飲食施設）

○古橋（2014）

大学図書館が学習場所として挙げられる理由は、図書館が教育や研究の支援機関として存在しているからだとした

= 勉強することを目的とする施設で、若者が勉強する理由は明らかである

先行研究②

○内田・大方（2010）

カフェは、日常生活の疲れを癒すことのできる居場所でもあり、「知的フォーラム・個人のオフィス」としても機能する居場所でもあるとした

= 勉強する利用者にとっての**居場所としての機能が明らかとなっている**



だが、若者が勉強で利用する公共空間には、学習を支援する場でもなく、勉強することを目的としない施設で、かつ金銭のやり取りなしで空間を得られるような空間が存在する。

= **既存の研究では説明することができない**

調査対象地

○オーバードホール中ホール

- ・ 場所：富山県富山市（富山駅北口）
- ・ 2023年7月に開館した文化施設

建設当時の担当者へのインタビューより

- ・ 文化は人と人をつなぐ触媒である

→**気軽に人が集まることができるような空間**に

→イベントがない日は無料でメインロビーやホワイエを開放・椅子や机の設置

= 若者が勉強することを目的として建てられた施設ではないが、多くの若者が勉強のために利用している

研究目的

○調査対象者：**高校生**

- ・理由 自宅から通っているから
学校が終わったあとの制約が小さいから
勉強する意志が高い（求められている）から

○目的

- ①勉強することを目的としない空間で高校生が勉強する理由を明らかにする
- ②他の施設と比較し、オーバードホール中ホールが利用する高校生に与えている効果を明らかにすることで、どのように機能しているのかを検討する。

調査方法

○調査対象地（人数）

①オーバードホール中ホール（30）

②比較する施設：マリエ（6）、マルート（8）

→駅前で配布したアンケート調査・観察をもとに

○調査方法

・それぞれの場所での聞き取り調査（10～15分）

・日時：①9月17日～19日16時30分～21時30分

②10月21日～22日16時30分～19時30分



図1. 調査対象の施設

勉強目的で利用する施設の実態

○利用者の属性

- ・表1より、
3年生が多く、受験を意識
して利用している。

表1. 学年

	3年生	2年生	1年生
マリエ	4	2	0
マルート	4	0	4
オーバードホール中ホール	20	7	3

- ・表2より、
県内において、**進学校の**
高校の利用者が多い。

表2. 通っている高等学校

	呉羽	富山東	中部	富山	富山いずみ	その他
マリエ	2	2	0	0	2	0
マルート	3	0	3	0	1	1
オーバードホール中ホール	12	5	4	3	3	3

(インタビュー調査より作成)

勉強目的で利用する施設の実態

○物的側面

表3 勉強する場所で勉強しない理由

CiC（3階・5階）	きらり	地域の図書館	学校の自習室
私語禁止（3）	私語禁止（1）	私語禁止（1）	私語禁止（2）
飲食禁止（3）	飲食禁止（1）	学校から遠い（1）	雰囲気がピリピリしている（2）
不定期で使えない（2）	閉館時間が早い（2）		飲食禁止（1）
閉館時間が早い（1）	駅から遠い（2）		閉館時間が早い（4）
使い方が分からない（1）	乗り換えなければいけない（1）		
雰囲気が張りつめている（6）	雰囲気が勉強という感じ（1）		

- ・ **閉館時間の早さや学校からの通いにくさ**が、利用しない理由として挙げられた。
- ・ 私語禁止や飲食禁止といった**施設を利用する際のルール**があることについても利用しない理由に挙げられた。

勉強目的で利用する施設の実態

○物的側面

表4. 勉強することを目的としていない施設で勉強する理由

マリエ	マルト	オーバードホール中ホール	飲食店	富山駅新幹線口2階デッキ
駅から近い (2)	無料 (3)	無料 (2)	安い (2)	駅に近い・移動に便利 (1)
友人と勉強できる (2)	駅に近い (4)	駅から近い (7)	長時間の滞在可能 (4)	会話可能 (1)
程よい雑音がある (3)	お店が多い・買い物できる (6)	開館時間が長い (2)	飲食可能 (2)	
会話可能 (4)	内装が良い (1)	程よい雑音がある・音楽 (5)	会話可能 (2)	
自由に過ごせる (2)	空調が暖かい (2)	内装が良い (4)		
雰囲気が高い (4)	時間を気にせず利用できる (1)	空調が利いている (2)		
	程よい雑音 (1)	コンセントがある (2)		
	会話可能 (2)	会話可能 (12)		
		飲食可能 (7)		
		自由が利く (4)		
		雰囲気が高い (4)		
		落ち着く (6)		
		集中できる (6)		

・ **学校からの通いやすさ**や**閉館時間が遅い**ことが利用する理由として挙げられた。

・ **施設利用上のルールがない**ことに良さを感じている。

= **自由が利く**

勉強目的で利用する施設の実態

○物的側面

- ・ TOYAMAキラリ、地域の図書館

→ 駅からの遠さ、学校からの遠さ

- ・ 全ての勉強を目的とする施設において

→ 閉館時間の短さ

= **学校が終了してからの利用のしやすさ**を重視

→ 私語禁止・飲食禁止

= **自由度の高さ**を重視

勉強目的で利用する施設の実態

< 心的側面 >

- ・ 「CiCは**こわい**，雰囲気**が張りつめ**とって。」（マリエ 高3 女性）
- ・ 「塾とかだったら，みんな**張りつめて**勉強しとるけど，ここ（中ホール）だったらまだみんなしゃべるとるから**気が楽**。」（中ホール 高3 男性）
- ・ 「CiCはすこし静か，**緩く**やりたい。雰囲気**が張りつめ**とったら，早く帰りたい。でも，ここ（中ホール）だったら**窮屈感じん**。」（中ホール 高3 男性）

勉強目的で利用する施設の実態

< 心的側面より >

- ・ 勉強する場所に対して、高校生は「こわい」や「張りつめている」といった**マイナスの感情**を抱き、空間に対して**居心地の悪さ**を抱いている。

- ・ 勉強する場所ではない場所の雰囲気に対して、高校生は、勉強以外もできることから、「**勉強を強いられない**」ため、「気が楽」や「窮屈を感じない」と**プラスの感情**を抱いており、**居心地の良さ**を感じている。

勉強目的で利用する施設の実態

○勉強する場所でない場所に学習空間が成立する条件

- ・勉強するために施設を利用することが許されていること
- ・学校が終了後からの利用がしやすいこと（立地・時間）
- ・自分自身の行動が制限されていないこと
- ・勉強しなければいけないという決まりがないこと

勉強を目的としていない施設の 利用実態の差異

○滞在時間

表5より、中ホールは、長時間滞在する利用者が多く、マリエ・マルートは短時間が多い

表5. 滞在時間

	1時間以内	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4～5時間	5時間以上
マリエ	0	0	6	0	0	0
マルート	2	3	3	0	0	0
オーバードホール中ホール	0	0	10	7	6	7

(インタビュー調査より作成)

○利用頻度

表6より、中ホールは高頻度で利用する利用者が多く、マリエ・マルートは頻度が少ない

表6. 利用頻度

	ほぼ毎日	週に数回	週に1回	月に1回	数か月に1回	不定期	はじめて
マリエ	0	2	0	0	0	2	2
マルート	0	2	1	1	1	1	2
オーバードホール中ホール	15	7	4	0	0	1	2

(インタビュー調査より作成)

勉強を目的としていない施設の 利用実態の差異

○利用時に注意していること

<マリエ・マルート>

- 「消しカスは残さないようにしてます。」（マリエ 高1 女性）
- 「注意書きがしてあるので、大きな声は出さないようにしてます。」（マルート 高3 女性）



- **公共の場**であることから、基本的なマナーに気をつけて利用している
- **施設側からのはたらき**で、自分の行動を制限している

勉強を目的としていない施設の 利用実態の差異

<オーバードホール中ホール>

- 「あんまり（スマホを）触りすぎんように、自分が思うからこそ、**周りも勉強しとるし、騒いだりとか、長時間スマホ触ったりすぎんようにしたり。**」（中ホール 高3 男性）
- 「騒ぎすぎないように勉強しようと思ってます。**周りが勉強に集中しとるのを見たら、邪魔をするのは良くないかなって。**」（中ホール 高1 男性）



- **他の高校生のために、自身の行動を制限**
= 利用者同士でよりよい学習空間をつくっている

勉強を目的としていない施設の 利用実態の差異

○他の高校生の存在が気になるか
<オーバードホール中ホール>

・「同じ学校の友達やったりとか、他校の友達やったりとか、結構いろんな人がおるから、それでちょっとしんどい時とか、**友達おるの見かけて、俺もじゃあ頑張ろう**かなって。」（中ホール 高3 男性）

・「みんな勉強しとるんで、引っ張られるみたいなの。**みんな頑張っとるから自分もやろ**みたいなの。」（中ホール 高3 男性）



勉強を一緒にする仲間として認識している

勉強を目的としていない施設の 利用実態の差異

○他の高校生との交流の有無

マリエ、マルート：0人

オーバードホール中ホール：15人

・「まじの初対面とかはさすがに話せんけど友達の友達。中学一緒の人がつなげてくれて、友達3人くらい増えた。**毎日勉強する仲**になった。」（中ホール 高3 男性）

・「中学の友達が違う友達と来とって、こっちも違う友達と来て、仲良くなりました。**バラバラで会ってもしゃべるよう**になりました。」（中ホール 高3 女性）

勉強する場所でない場所で勉強をする理由

○利用実態より

・利用している学生の多くが進学校・受験期

= **勉強をしなければいけないという強迫観念**

・学習空間が成立する条件より、勉強しなければいけないという決まりがなく、自由が制限されていないことを好んでいた

= **勉強を求められる空間からは解放されたい**



相反する2つの感情が学習空間の成立を促進

= 勉強している若者も既存の研究と同様の理由をもつ

仲間意識の形成

<交流の有無に差が生じる要因について>

○マリエ、マルート：仲間意識が形成されにくい

・理由 **勉強以外を目的とする利用者が多い**

人の出入りが多く、利用可能の場所が1か所ではないため、利用者が固定されにくい

○中ホール：仲間意識が形成されている

・理由 **利用者が全員、勉強という目的で利用している**

利用者が固定される（滞在時間・利用頻度）

中ホールが果たす機能

< 中ホールが持つ特性 >

・ 建設当時、現在の担当者への聞き取り調査

→ もっと使ってほしい (好意的な印象)

・ 職員の方への聞き取り調査 → 干渉はほぼなし

= **勉強することを妨げない設計・環境**

・ 他の施設よりも出入りが少なく、音楽や内装等によって落ち着いた雰囲気ある = **勉強により集中しやすい環境**



共通の目的を持つ高校生が自然と集まり、仲間意識が生まれやすくなる

中ホールが果たす機能

<中ホールに成立する学習空間>

- ・ 無意識に形成された仲間意識 = **社会集団**の形成
- ・ **社会集団**に必要な要素は、久保田（2021）により、
 - ①共通の目的や関心をもっている
 - ②持続性がある
 - ③組織性がある



- ・ 勉強という**共通の目的**を持つ
 - ・ 利用頻度の高さ・空間が継続している = **持続性**がある
 - ・ 利用者で良い学習空間を形成しようと協力 = **組織性**がある
- **勉強を目的とした社会集団**が形成されているといえる

中ホールが果たす機能

<高校生に与える効果と機能>

- ・勉強をすることで、勉強しなければいけないという強迫観念を和らげることができる

○勉強を手段に社会集団に所属することで

- ・一緒に勉強している仲間がいるという**安心感**
- ・他者とのつながりを実感できる = **孤独感を感じない**



精神的に良い居場所として機能している

おわりに

○まとめ

- ・公共空間を勉強で利用する若者も、既存研究と同様に、学校の評価基準から逃れたいという感情を抱いている
- ・オーバードホール中ホールのような、使い方が決められておらず、共通の目的をもつ利用者が自然と集まるような空間は、精神的に良い居場所として機能している

○課題

- ・限られた施設での調査のため、一般化することは難しい
→調査対象の範囲を広げていきたい

参考文献

- 内田文雄・大方健太郎. 都市空間における第三の居場所としての現カフェに関する研究. 山口大学工学部研究報告 60:57-61.
- 遠藤瞭太・後藤春彦・山村崇 2014. 大学生の学習場所としてのサードプレイスに関する研究. 都市計画論文集 49:1083-1088.
- 久保田正雄 1965. 社会集団の概念について. 政経論叢. 33:129-150.
- 田中康裕・鈴木毅 2005. 子ども・若者にとっての居場所の意味とその類型についての考察. 人間・環境学会誌 9:27.
- 古橋英枝 2014. 大学生の学習実態に基づく大学図書館の役割. Library and information science. 72:95-121.
- 宮台真司 1997. 『まぼろしの郊外 成熟社会を生きる若者たちの行方』. 朝日新聞社:146-148.
- 文部科学省 2024. 『子供の居場所づくりに関する指針』

https://www.mext.go.jp/content/20241115mxt_chisui01_000038821_11.pdf
(最終閲覧日:2026年1月15日)